

一

性悪

伊豆時代小四郎×和田合戦後くらの平六

「さあ。夜になったから、死ぬほど後悔させてやる」

甘い声からは想像もつかない程物騒な言葉を吐いた男は、次郎と小太郎と別れたあとすぐに昼に目が覚めた米蔵へと向かった。訳も分からず手を引かれた小四郎もとりあえずは足を突っぱねて抵抗してみたものの、あまりの平六の力強さにそれは無駄に終わった。何なんだこの力は。

蔵の中に入った途端、ぽいつと腕を引っ張って投げられ、床に押し付けられる。起きた時とは違い、腰を跨いで小四郎にのし掛かってくる男の目の前で思わず手を振った。

「ちょっとお待ちなさい！ どういうつもりだよ!？」

「はあ？ おいおい、忘れたとは言わせねえぞ、今朝のこと。俺に向かって『そそられない』とか言いやがっただろ」

覚えてはいる。が、この男がそこまで根に持っているとは思っていなかった。

あの一言は、予想以上に男の競争心のようなものを刺激したらしい。

『『小四郎』と同じ顔で言われると腹が立つんだよ。絶対その気にさせてやる』

ふふん、と笑った男はもしかすると、ちっとも丸くなっていないのではないか。昼間の

こといい、小四郎はそのことによく気づいた。

確かに雰囲気は柔らかくなりはしたが、根本にあるものは変わっていない。

生意気で負けん気の強い、自分がよく知る「平六」だった。

「……おい、何笑ってんだ」

「いや、なんか安心して」

「は？ お前今から、俺に搾り取られるってこと分かってんのか？」

「お、お手柔らかに……。い、いや、よろしくお願いします！」

先程しみじみとしていたことなど何処かに吹き飛び、思わず興奮して声の上擦ってしまふ。こんなことを平六が言ってくれるようになるなんて。末末の自分が羨ましい。

ふ、と笑われる。そして、欲に濡れた顔が降りてくる。

目を閉じて口付けを受けながら、やはり男の方が年上なのだと知った。舌を吸われ、齒列を丁寧に丁寧になぞられる。唇がつやつやとしていて柔らかくて気持ちがいい。ずっと触れていたいと思うくらいには。口腔を隈無く探られ、しばらくすると満足したのか、一度唇が離れた。

目の前にある顔をじっと見つめる。親指の腹でそっと所々触れてみた。

「どうかしたか？」

「いや……皺とかも全然無いんだなって思ってた……」

よく見てみても、男の目元にも頬にもそれらしいものは見当たらない。

自分にも勿論無いが、この男に無いのが不思議に思えてくる。具体的にいくつなのかは聞いてはいないが、話し方や雰囲気からしてかなり年上ではないのかと思っていたのだ。

「変わらねえのは見た目だけだぜ。四十を超えてから、体力はめっきり落ちた」

「し、しじゅ……!？」

そこで初めて男の年齢を知り、ガッ!と顔を掴んでまじまじと見た。くりくりとした大きな瞳と、長い筋の通った鼻と、なめらかなおなごのような白い肌。とても四十を過ぎた男のものとは思えない。

これが四十の男かと思うと、不気味にすら感じられる。何かの薬を飲んだのか、狐か何かに変かされているのかと疑うほどだ。

驚きを隠さない自分を面白そうに見ていた男は、こちらの唇を指の腹でゆっくりとなぞる。「その反応、新鮮だな。あっちの小四郎にも時々驚かれるが……」

むすりとしてしまう。自分の唇を触られながら、他の男のことを考えられるのは良い気分ではない。

だが平六はそんなこちらの様子など気にも留めずに笑う。袴の帯より下がった部分、そこ

の膨らみにゆっくりと触れると、そのまま揉みこむように掌で弄ばれた。

「若い頃のお前でもその気になってくれるなら、俺もまだまだいけるってことか」

「っ！ こ、これは……」

「口吸いだけでこんなになるなんて、お前も可愛かったんだなあ、小四郎」

まざまざと口に出され、かあっと頬が熱くなった。形のいい掌に脚の間を怪しい手つきでするりと撫でられ、熱を持ち始めていたその場所へ本格的な愛撫が施される。

なぞるように上下へ指先を動かされると、素直に反応したそれが徐々に形を変えていくのが自分でも分かった。

「いい子だな。もう少ししたら、外に出してやるから」

でも今はまだ窮屈な中で大人しくしていなさい、と窘められる。やられていることは淫靡なのに、口調は子どもに諭すかのような響きを孕んでいていたたまれなくなってしまう。

平六は反応を示したそこを見つめながら話す。どこに話し掛けているのだからかなり恥ずかしくなってきたが、彼が楽しそうなのでされるがままにしておいた。

次第に行為は発展し、袴の上から赤い唇を這わされる。目を逸らしたくなるような染みがじわじわと浮かんた。

「ん……？ もう形がはっきりわかるな」

「へいろく、なあ、そろそろ……」

「だめ。もう少し遊びたい気分なんだよ」

快感よりも窮屈さから痛みが強くなってきたそれを横から食んで、唇を滑らせる。時折淡く歯を立てられ、その刺激だけで達してしまいそうになってしまう。

口淫は何度か彼にもしてもらったことはあるが、こんな風に焦らされたことなどなかった。いつもたどたどしくてかわいいとすら思うのに、一体どこでこんなことを。

「ん、おおい……」

「っ、あ、あんまり見ないで……」

ふいに袴を剥ぎ取られて窮屈にしていたそれを取り出される。禪をずらされると勢いよく出てきたそれを見て、平六はにんまりと口角を上げた。

自分でも驚くくらいに反り立つそれをまじまじと見つめられて、恥ずかしさに顔を逸らしそうになる。今まではこんな、ほとんど触れられてもないのに反応を示すことなんてなかったのに。

ぱく、と小さな口にそれを咥えられる。亀頭がぬるりと熱く柔らかいものに包まれて、思わず腰が跳ねた。ちゅ、とまるで赤子が乳を吸うように吸いつかれ「ひっ」と情けない声が出る。先端が熱く濡れたもので覆われ、それがぬるりと動くのは思わず喉が反るほどの快楽を小四

二

熟知

執権殿×伊豆時代平六

そういわれてしまえば、平六に伸びてくる手を拒む理由は、もうどこにも無くなってしまう。

指を胎内で動かされると、ぬちりと酷い水音がした。温かい液が尻を伝う。きゅうと体に力が入ったのと同時に、もう一本の指が中に素早く入り込んで来る。

「あ、っ……」

耳から首筋、胸先へと舌が這う。熱く濡れたそれが肌を辿るたびに声が漏れた。ぐちぐちと股座に伸ばされた手が動く度に、聞くに堪えない自分の声と、はしたない音がする。

乳頭を執拗に舌尖で弄られれば、びくびくと全身を震わせるしかない。

「ン、このっ、も、しつけ、え……!!」

「……まだ、」

「まだ、って。もう、あ、さっきから馬鹿みてえに、ずつと……、ああっ!」

指の腹でくりくりと先端を回されながらどうにか反論しようとするが、思うように言葉が出ない。平六の息も絶え絶えな言葉など耳に入らないのか、覆い被さってくる男は、まるで肌を味わうように汗を舐め取ってくる。

まるで女の乳房を揉むように、手のひらで胸の肉を揉みこまれた。そのままじゅ、と蜜か何かを吸うように乳頭に吸い付かれ、固くなりつつあった飾りを舌で転がされた。いや、と弱々しい声が漏れる。その声に男がふ、と笑ったのが息の温かさで分かった。

やわらかい。自分の知っている小四郎を彷彿とさせる口調が耳に入る。見上げると、男の髭を蓄えた唇は弧を描いていた。

「この時のお前にこんな風に触れる余裕なんて、あの頃は無かったからな……」

「な、なにが……、っ!？」

脚を大きく開かされ、すでに濡れて屹立していたそれをまじまじと見つめられる。

それどころか、尻の肉を割り開くように左右に広げられ、指が入ったままのその奥まった縁をじっくりと眺められた。

「やめっ、おまえ、スキモノかよ……っ!？」

何度か抱き合ったことがあるとは言え、こんな風に直視されたことなんてない。小四郎はいつも必死で、へいろく、かわいい、そんなことを言いながら抱き着くように掻き抱いてくる。必死なくせに変なところは優しくて、平六が少しでも嫌がるようなことはしないのに。

「こんなに小さな尻なのに、どうやって俺のが入るのだろうと、いつも心配になる」

「ひ……っ!」

ずるずると、中を引つ搔くように指が抜けていったと思うと、また勢いをつけて戻ってくる。そうだと、いうのに平六が我を忘れて善がる場所には触つてくれない辺り、この男は相当地が悪いようだ。

ぎ、と男を睨みつける。開かされたままの足先に、己の袴が引つかかっているのが目に入る。

紫紺の直垂も中途半端に脱がされ、肩にかかったままだ。動きづらさから何度も脱ごうとしたものの、「そのままがいい」と子どものように駄々をこねる小四郎に負けてこのままにしておいてやっているが、平六は気付いてしまった。この男、自分の中の昔の「平六」が着ていた服を身に着けさせたまま、己を犯したいのだと。それが証拠に、何度も何度も確かめるように顔や体を眺めてくる。まるで助平親父だ。

片足を肩に乗せられる。持ち上げられた拍子に、穴に入つたままの指がぐつと奥まで入り込んでくる。ごつごつと骨ばった指の関節が粘膜をこじ開ける感覚に、ひゅ、と喉が鳴って目の奥がちかちかと白くなった。

「……ッ！」

「やはり若いな。締まりも良い」

男は平六の内腿に唇を寄せる。すうっとそのまま辿られるとどうしたって腰が震えた。皮

膚の薄い部分をくすぐられる感覚が頭をくらくらとさせる。時折肌の弾力を楽しむように齒を立てられる。や、と喉を浮かせたときに、震えた自分の性器から少量の先走りがぽとぽと零れるのが分かった。くそ、こんな、まだ触られてもいないのに。なんで。自分の肌を堪能する男を罵倒してやろうと、少し身を起こす。

「も、お、はなせ、へんたいおやじ…、ひ……っ!」

ずるり、と今度こそ指が抜けていった。その衝撃のせいで考えていた罵詈雑言は頭から飛んでしまう。また指を付き立てられるのかと目を閉じた平六が味わったのは、ぬるりとした熱いものが、とんでもないところを這う感覚だった。

「は……!」

平六が頭を上げて真っ先に見えたのは烏帽子だった。自分の股の間に、男の顔が挟まっている。

「な、なにを……、っ、あ!」

人差し指で少し捻げられた淵に、男の舌が入り込んでくる。じゅる、とそこを吸うような音が聞こえてきて、羞恥で涙が滲みそうになった。熱く濡れた舌がそんなところを伝う感覚はどうしたって受け入れ難い。唾液でそこが乾いて冷たくなる前に、またちゅる、と音を立ててそこを吸われる。

何なんだこの男、なんでこんなところを。ちゅばちゅばと赤子が指を吸うような音を聞き、何とか逃げようと足を突っ撥ねようとしても、片足をがちりと掴まれた状態ではそれは叶わない。縁どころか中に舌を振じ込まれて、平六はいよいよ声に泣きが入った。

「こ、し、お前、そんなところ……っ、しよ、正気かよ……っ」

何とか辞めさせようと言葉を紡ぐが、小四郎は目もくれない。卑猥な水音と己の聞くに堪えない喘ぎだけが部屋の中に反響する。この男、年を取ったらこんなにねちっこい行為をするような奴になるのか。最悪だ。

そして何より最悪なのは、こんな変態みたいなことをされてもお、感じ続けてしまう自分の体だった。

ふるふると震えるものの先端から、だらだらと流れ出す白濁が目に入る。やめろ、そう言いながらも、段々と抵抗は弱まっていつてしまう。

啜り泣くような声しかあげなくなった平六の様子に気づいたのか、散々こちらの体を甚振ってくれた本人が顔をあげる。涙を受かべて肩で息をする己を見ながら、男は満足げに息を吐いた。

「そろそろいいか」

前を寛げた男のそれが飛び出してくる。